

# 明治後期信州教育界と五無齋保科百助

——風狂と〈ほんもの〉——

教育哲学・教育史研究室 平 沢 信 康

## Hyakusuke Hoshina (Gomusai) in the Educational World of Nagano Prefecture (Shinshū) during the Latter Part of the Meiji Era —— Eccentricity and Authenticity ——

Nobuyasu HIRASAWA

The teacher's status in Japanese society was generally high in the early Meiji era. But, political restraints and poor pay gradually made it decline from the middle of the Meiji era. As the school system and teachers' professionalism were established, contrary to expectation, teachers tended to become demoralized.

In this situation, Hyakusuke Hoshina (1868-1911) undertook various educational activities to raise the morale of persons involved in education in Nagano Prefecture. He was an elementary school teacher, a scholar of geology and mineralogy, and a collector of stones and minerals in Nagano Prefecture (distributing many specimen boxes to schools). He also founded a library and a private school for poor youth, published a newspaper, and furthermore twice stood for the House of Representatives. He was a man belonging to the tradition of high minded person who were well-versed in Chinese classical literature. At the same time, he was famous for episodes of eccentric behavior. In spite of criticism from educational bureaucrats, this idiosyncratic educator who wrote comic *tankas* (poems) came to be loved by many people.

This paper describes his sincerity and enthusiasm in the quest for educational truth, and tries to place him in the context of the history of educators in modern Japan.

### I はじめに

明治初期の教師は、江戸時代の伝統をうけて天（聖）職観を抱いて自負し、社会的にも尊敬される存在だったが、集会条例・小学校教員心得・箝口訓令等の政治的圧迫はそうした気風を漸次失わせ<sup>1)</sup>、経済的待遇の劣悪化もその社会的地位の下落に拍車をかけた<sup>2)</sup>。教員養成では、森有礼による国家主義的・準軍隊式の師範教育が断行され、その教育は次第に画一的に硬化し形式化して、いわゆる“師範タイプ”と批難される教師群を生んでいく。しかも学校体系の整備過程を通じて、中学—帝国大学というエリート養成の幹線ルートから分離された府県立の尋常師範学校は小学校教員養成の専門機関として位置づけられ、明治30年代以降、次第に地域の最高学府たる地位を失い、普遍性につらなる学問の場というよりも

地域還元的な閉鎖的職業訓練の場という性格を濃厚にしていく<sup>3)</sup>。こうして、教職の専門性そのものは制度的な意味で確立する一方で、明治前期の教師たちがもっていた“士大夫の気概”といったエートスについては、その喚起基盤が喪失され、教育創造の余地も縮小されるという状況が生まれていった<sup>4)</sup>。

教員史研究における明治中期以降の教師像は卑屈でさえある<sup>5)</sup>。しかし、教師の社会的地位と志気の低落にあくまで抗し続けた教育家がなかったわけではない。本稿は、教育先進県・長野の特異な教育家・保科百助（1868-1911）にその代表例を見出すとともに、明治後期教員社会をめぐるそうしたエートスの変化について再確認することをねらいとする。

日清戦争期から初等教育就学率は徐々に上昇を始め、長野県では明治34年に90%を突破し<sup>6)</sup>、30年代には“信州教育”なる言葉が登場流布し<sup>7)</sup>、同県は教育国という

冠称を自他ともに許すに至る。この時期について守屋喜七(昭和戦前期の信濃教育会主事)は“教育者の意気の尤も旺盛な元気の張り切った居た時の様に思はれる。教育者と云ふ教育者が何れも進取的であり積極的に活動したため、学校生活にも各特色を発揮し学校内の空気が何処となく生々発展の若々しい処があった。自分にしても、自分の教育的生涯中、此時が今から考へて一番明るく愉快的感じのした時であった”<sup>8)</sup>と回想している。この“発展時代”に、保科は小学校訓導・校長として多彩な活動を展開して信州教育の高揚を担い、教育界の鬼才として認められ、33年頃には“異様な評判男”<sup>9)</sup>となっていた。

彼は親友をして“奇人といはんか、偉人といはんか、はた狂人といはんか……(中略)……もとより尋常一様の人物にあらざる故、見る人により豪傑とも見え、又悪人とも、馬鹿とも、危険人物とも、神仏の如くにも見え、その行動を部分的に見るときは正義、義侠、自由、平等、傲慢、執拗、滑稽詐欺、恐喝、狂劇、慈善、正直、博愛、等種々様々に見らるべく、之を総括的に見て判断を下すことは容易にあらざるべし”<sup>10)</sup>と語らせた人物である。これまで、保科についての評伝類はあっても学的論稿はなかった。生い立ちから30年代初めまでの詳細は別稿<sup>11)</sup>で扱ったので、参照を請うとして、本稿では主に教員退職後の活動の全貌を叙述し、彼の奇行と風狂、さらに倫理的資質にふれて、最後に教育社会史上の位置づけを試みたい。

## II 実物教授への情熱——標本づくり——

### A 長野県産地学標本

保科は地質学研究、とくに岩石鉱物採集をライフワークとし、34～5年と42年の2回、県下大採集を行い、収集資料を調整して長野県産地学標本を作製し、県下各校に頒布した。

師範学校在学中から植物や昆虫等の採集に興味を有した彼は、小県郡本原小学校訓導時代(26.4～28.3)に関心を鉱物に絞る。同郡武石小学校時代(28.4～32.3)、教職の余暇に年間数十日を採集旅行にあてる努力のなかでの玄能石と緑簾石の発見(28年)は、中央学界に波紋を投じて彼の名を知らしめ、多数の研究者や学生の来訪をもたらした。翌年、校長に就任した彼は、帝国大学理科大学地質学科鉱物学教室の神保小虎教授(1894年から講座を主宰; 1867—1924)の下に研究生となり地質学結晶学を学ぶ。以来、しばしば神保門下の信州各山の登山に同行し案内役を果たした。高等数学の素養の欠如か

ら“奇石亭の地質学者”“骨董的鉱物学者”と神保に冷笑されながらも、精進を続け、彼の“鉱物探険熱は人が狂と認める程熱烈”<sup>12)</sup>なものとなった。33年に開催されたパリ万国博覧会に政府から出陳された和田維四郎の鉱物蔵品302種のうち、信州産13種の半数ほどは保科の採集発見になるものであった<sup>13)</sup>。

教職に拘束される採集活動にあきたらぬ彼は、師範学校官費給費制に随伴する教職服務義務年限の10年が終ると、北佐久郡蓼科小学校校長兼蓼科農学校校長を最後に、34年3月、辞職して信州全域に及ぶ包括的な採集に挑む。理科教育、なかでも特に立ち遅れている地学鉱物学の“智識普及の一捷徑”は教授用鉱物標本の作製にあるとする使命感が、“27円校長の大栄職”<sup>14)</sup>を擲たせたのだった。

5月1日から着手された採集は、寄附金募集が途中で破約にされ、当初から資金面でつまづきをみせたが、“復讐心”<sup>15)</sup>を発条として継続され、彼は県内の友人宅に食客となるなどして県下を漫遊した。“ぼろぼろの古服を着て、玄能を前に差し、腰には人並み外れた大きな火の用心の胴藍、白木綿の汚くなった大袋を前後に振り分けて肩にな”<sup>16)</sup>い、1日“十貫目の荷を負いて十里余を歩”<sup>17)</sup>く鉱物採集は、単身で人跡未到の峻嶮を攀ち、大川を渉り、風雨に曝され、いつ行き倒れになるかもしれない苛酷で孤独な作業であり、しかも“金槌を以て岩石鉱物を相手とする”ため生傷が絶えなかった<sup>18)</sup>。かかる危険から、漫遊中、採集メモたる「野帳」の最後の頁に、彼は戸籍謄本の写し(無職業遊歴人保科百助と署名)と共に、遺言歌“我死なば 佐久の山部へ送るべし やいてなりとも 生マでなりとも一但し運賃は向払にて苦しからず候”<sup>19)</sup>と記していた。

彼はまた、他日、登山者の道しるべとも、死後の墓碑ともなれかし、との希望から、高山大岳の大盤石に祖先伝来の家紋・九曜星(角九曜)を刻し、その数300余カ所に及んだ<sup>20)</sup>。保科は、日本アルプス登山黎明期の開拓者の一人であった<sup>21)</sup>。

この間、信濃博物学会が長野師範学校博物教室で発会する(35. 6. 15)。開会の辞を述べた同校教諭矢沢米三郎は、長野県の教育は天下に冠たるものの、理論研究(教育学・心理学・哲学)は盛だが、“実地の研究が伴はない、実質の資料に心を用ゐない”として、歴史や地理、とくに物理・化学・博物の研究の幼稚さへの反省を促し、さらに、南北70余里、東西50里にわたり、高山峻嶺・河湖沼沢等自然物に富める同県に居て自然を研究しないのは“所謂天物を暴殄すると云ふ者ではあるまいか”<sup>22)</sup>と博物学研究の意義を力説した。同会は「信濃博物学会雑

誌」を発刊するが、創刊号は、渡辺敏校長の協力により長野高等女学校へ送られ集められた保科採集の岩塊（同校体操場を岩石の山と化して使用不能とした）について“恐らくは県下の鉱物標本中此位大きな此位立派の標本は少かるべし 熱心の士は之を参考として研究せば得る所決して鮮少なからざるべし”<sup>23)</sup>と賞讃した。その後も同誌は彙報欄で彼の動静を伝えた。

35年11月末日までの約1年半の間に、400余種3万余塊の標本を収集した彼は、翌年1月から4カ月間、「通俗滑稽信州地質学の話」を「信濃毎日新聞」に数十回にわたり連載し、斯学の啓蒙につとめた。内容は後半専門的で難解となり、“素人分りのするやうに”とのねらいは成功しなかったが、“学者とは何の九もなき事を八釜しく七六かしく五も一つ事を二三遍繰り返しても四ろう人には分らぬやうに説明するものなり”“壺式割法螺もあらうが是丈は 許してホシナ用捨しん聞”といった言葉あそびや“無始無終洪大無辺の世の中に小さくなるなデカイ事せよ”<sup>24)</sup>等の箴言の挿入は彼の持味を活かして読者を退屈させなかった。

信濃教育会は生徒賞品用書籍「少年叢書信濃国」第二編の地学金石に関する事項の編述を、5月、保科に囑託した。博物学会では、無味乾燥になりがちな斯学も彼の才筆によって光采を放とう、と期待した<sup>25)</sup>。教育会総集会（6月）でも、保科採集の標本陳列は大いに会員の注意を惹いた<sup>26)</sup>。同月、長野県郡視学会席上、関本知事は訓示のなかで“学校購入品ノ外教員ノ蒐集品・工夫品ヲ奨励シ、直観的教授ノ完全ヲ計ル”旨<sup>27)</sup>を要望したが、保科の仕事は当時の教育行政の要請とも合致し、かつ、それを先導するものだった。

整理費捻出に苦慮しながらも、36年10月、彼は1組243種の「長野県産地学標本」100組を完成させ、師範学校ほか県下各校に頒布した。また、帝国大学・東京帝室博物館・皇室へ献納し、知事や町村長から賞（礼）状・木杯を、宮内省から下賜金を授与され、ここに彼は県博物学界の泰斗となった。

同年、彼は長野高等女学校（のちに2千余の鉱物標本を同校へ寄贈、41年春賞勳局から銀盃を下賜さる）において鉱物の展覧と講習を幾度か行った。以後、県内各地の教員に対して講演を頻繁に行い、採集実地指導に当たることも多くなる。当時、彼の講習を聴いた東京帝大地質学科の一学生は“百助氏の風貌を窺って地方在住者が如何に熱烈な態度で地学に精進されるかを知って、教室での学問に熱のないことを感じた”<sup>28)</sup>と告白している。彼の標本の形の見事さは、標本屋の到底及ぶところでない、神保教授はじめ教室一同の嘆称するところであり、

肉眼の鑑別力の透徹にも彼らは敬服していた<sup>29)</sup>。

前回標本は種類は多いが小形にすぎる等、不満をおぼえた彼は、ライフワークの総決算の決意を固め、42年4月5日、友人4名と再度の大採集のため県下漫遊に旅立つ。約180日間に120種7万2千余塊（前回に比して数量で2倍、重量は10倍以上）を採集した。これを基に、翌43年、120種の「信州産岩石鉱物標本」が仕上げられ、600組が全国的に頒布された。“之にて Best を尽し”たと自負し、神保も完全に近いと評した同標本には、研究者に囑して作製した「信州産岩石鉱物説明書」と「百万分一長野県地質図」(三色刷)および自著「<sup>岩石</sup>新案教授法 全 一名 Nigirigin 式教授法」を添附した。

40年代に入って教授法は彼の重要関心事となったが、同書の珍妙な副題は“<sup>にぎりきんたま</sup>握拳丸”に由来する彼の造語で、地学の授業では標本を生徒に与えて観察吟味させ、教師は自分の一物を握って泰然自若、児童の自発的研究心の発動を尊重して待つべきだとする直観教授の奨励を意図するものだった<sup>30)</sup>。甚だ当然の主張ながら、当時のヘルベルト主義による形式的教授の弊をよく衝いていた。

土着の研究者・“石屋”として、彼は信州の理科教育をこうした貢献により独自の方向に前進させた。さらに家紋入りの鉱物教授用実験皿（薄鉄版製、金色模様、直径15cm）を作製し、44年には関東産岩石鉱物標本を計画したが、果せずに終わった。

## B 実業と教育——各種標本——

保科は鉱物標本のほか、生産教育に資すべき種々の標本を作製した。

明治30年代前半、彼は実業教育に熱心で、とくに機業染色に関しては県のリーダーとして地域の副業奨励に尽力したことは別稿で述べたとおりである。この間、織物（60反130円）を購入して約5×4cmの布裂に裁断し、東京工業学校教授柴田才一郎の選定を乞うて分類して名称品質産地価格を附記した「機織術併地理学参考用内外織物標本」300組の作製と県下各校への頒布（1組60銭、32.8）、上水内郡大豆島小学校での機業講習会の成果として「自校機業講習科生織成の標本」作製と、意見書を添えて県下600余校への自費頒布（33.1）、染色標本（色糸を3cm程に切り、厚紙に括り付けたもの）の作製を行っている。

このほか、武石時代の養蜂奨励（米国から蜜蜂を取り寄せて飼育をみずから試み、実験談を教育会等で講習）、大豆島時代（32.4-33.9）の苜蓿栽培、長野市街農園計画、諏訪の温泉利用養鶏の計画などの地域産業開発の研究と奨励、学校等への植樹（例・蓼科学校のポプラ）と終始

行動的だったが、「生産と教育」の視点に立つ活動は、教員辞職後しばらくは他の事業に忙殺されてか、手がけられなかった。しかし40年代に入ると、再び主要な関心事となり、死去までの約1年半、彼は最後の情熱を標本業に注いだ。

42年暮、陶漆器・織物・樹木・種子・稲麦・繭などの種類標本の調整販売を目的として“商工業並教育視察”のための約1年の全国漫遊を計画した保科は、43年1月10日、大山知事に面会を求め、その意を伝えて各府県知事宛の添書を乞い、知事は保科の業績を紹介し便宜供与を依頼した添状を書き与えた。その後、彼は上記のほか、青海亀・鰻・鮭の発生順序標本、淡水産魚介類、信州産生薬、森林土壌、肥料、毒草などの標本作製を計画し、44年には長野市内に売店を構え、同年2月には相州三崎に海産動物標本の入手交渉に出かけたが、これらの完成も全国漫遊も果せず倒れた。

### III 私立保科塾——貧困子弟のための中等教育

36年冬季、蓼科農学校で別科生を教えた保科は、青年教育の実態を知るに及んで、貧困ゆえに中等教育をうけぬ青少年のための私塾開設の想を練った。長野県では、32年から39年にかけて中学校の支(分)校が独立し、県立8中学校制が成立したが<sup>31)</sup>、依然、中等教育を享受しうる階層は限られていた。

36年10月、彼は「信濃毎日新聞」に「私立保科塾開設広告」を発表する。開塾の目的は“読書癖ある人物を養成し独学の精神を鼓吹し社会百般の実務に応ぜしむるにある”とされ、生徒資格は、高等小学校卒業者またはそれと同等の学力を有する者で公私立学校の生徒でない者、学問を為す時期を失った者と定められた。教科は国語と漢文、学期は11月1日に始まり1年で卒業、始業は夜明けを以てする(日中就業の生徒の便を考慮)とされた<sup>32)</sup>。

20名以上生徒が集まらない場合は開塾せぬ予定だったが、長野市長門町の12畳ほどの長屋に設けられた塾には、37年1月3日に30名、2月には140名が集まり、さらに増えていった。開設資金には、常宮・周宮両内親王に鉱物標本を献上した際の下賜金が活用された<sup>33)</sup>。そのほか、郡視学や教師から寄附金があり、これで四書・近古史談、平家物語読本等の塾備え付け教科書を購入した。

師範学校の恩師・浅井列は彼を“常に強を挫き弱に與する義侠心に富”<sup>34)</sup>と評し、丸山弁三郎(長野商業教諭。塾によく出入りし事業を助ける。のち長野市長)も、弱者や卑しき者に対する彼の寛大と親切を指摘している<sup>35)</sup>が、塾には主に東北信から貧困家庭の子弟が集まっ

た。かつて彼が差別解消に努めた大豆島村の被差別部落の子弟や在日韓国人の苦学生4人もいた。また、上田藩主の嗣子・松平忠正(子爵)が2階に寄宿し、地方名望家の子弟も来塾していた。

市内横沢町に移転後、37年5月、米国留学から帰朝した小池久吾を迎えて英語専修科を附設した。(帝大法科卒・長野新聞主筆の風間礼助も英語を教えた)さらに、ストライキ主謀の廉で長野師範学校を退学処分され、東京物理学校を卒業後、長野商業学校に赴任するが校長との肌合いの相違を理由に1日で辞職した前歴の持主・藤森良蔵を迎えて数学科を附設した。教師は無料奉仕に近く、渡辺敏の依頼で教鞭を執った小池が保科から受け取った報酬は、前後を通じてビスケットカン1ダースのみだった。このような待遇にもかかわらず、彼らの多くは保科の魅力に惹かれて塾で教えた。とくに藤森は彼と直情径行な性格が通じ合い、刎頸の交わりを結ぶ。藤森の後任として数学を担当した出浦四郎(小学校教諭)は、先輩郷家の不賛成を承知の上で“五無齋のもつある魅力にうたれて僕はふらふらと塾行きを決心して了った”<sup>36)</sup>と告白する。守屋はその理由に“保科の生活振りに寸分の飾り気や、うそ詐りのない、そうした赤裸々の真情に動かされた結果であろうと、つくづく感心した”<sup>37)</sup>と来塾の感懐を吐露した。塾には名士や専門家が訪れて課外授業を行い、保科は生徒を川原に連れて鉱物採集の実地指導に当ることもあった。

経営基盤は脆く、保科は塾の維持に苦慮し続ける。藤森と小池に相談の上、毎月1回、「通俗学術大演説会」を開催し、そこで徴集される会費を維持資金に充てることに決し、38年1・2月の2回開催するが、不成功に終わった。次に試みたのが、市内妻科での養禽である。彼は家鴨飼育に活路を求め、大阪や越後から雛を取り寄せ、また自ら孵卵器でかえして、100羽~200羽と飼った。曹洞宗善松寺中学林の厨を改造した塾舎の側には小川が流れ、飼育には好都合だったが、夏季、鳥の悪臭に閉口する塾生は線香を1本つつ点して授業をうける有様だった。39年7月には“つまなし養禽園主人”を自称して「長野肉食倶楽部」を設立、市民への廉価な鳥獣肉の供給を標榜して、家禽・家畜・鳥卵の定期購入者を募るが、飼料代の嵩み等から事業は失敗した。

貧困学生にとって、学業と仕事の両立は至難で、就業しなくても収入はほとんどの場合少なかった。この面からも行き詰りを感じていた保科は、39年8月4日、塾生一同を集めて教育勅語を奉読し、閉塾を告げた。“早晚再興をはかる”意思もあったが、実現されなかった。

#### IV 筆墨行商と社会教育

事業の失敗から負債をかかえた彼は、筆墨行商人に身を“落とす”。行商は、筆と墨のほか、硯・短冊・扇・色紙を扱い、当初、それらを入れた箱を積み重ね、風呂敷に包んで背負いながら売り歩いたが、40年、特別注文で朱塗りの車を造らせた(“火の車”という洒落)。2月、上京して仕入れをした彼は、商品をこの赤車に入れて21日、東京市板橋駅を起点として牽き始め、中仙道を下り長野に戻った。以後、県内各地の学校・役所・郡町村長宅等を巡回訪問しながら行商を続けた(本格的には過労のため黒内障に罹った41年末まで)。

教育家から、瓦斯竈の筒袖裃・前垂掛姿の行商人に転じたものの、いわゆる武士の商法で、ある村役所での商いはさながら“役所の長が職員に訓辞でもしている風景”<sup>38)</sup>だった。1カ月の利益は20円内外にすぎなかったが、それでも、こうした行商が可能だったのは、名物男としての知名度によるところが大きかった。巡回中、短冊や色紙に狂歌を揮毫することを求められ、当意即妙に書き与えたほか、しばしば、各地の青年会・婦人会・報徳会等に招かれて講演し、多いときは1日3回、8時間に及ぶこともあり、“演説屋”と自称したこともあった。演題は、地域産業開発(養豚等)や治水問題、教育論や恩田木工論、地学に関するものだった。彼の話は、のびのびと声がよく通り、狂歌や駄洒落や奇抜な比喩を交えて内容も杓子定規でなく、容貌態度も滑稽で、また無遠慮に他人の言い得ざる所を言うため、常に喝采を浴びた。慰労会では、“御神酒を頂戴”して痛飲し、気焰を上げるのを常とした。商人の身ながら、彼は秀れた社会教育家・名士として認められていたが、同時にエンターテイナーとして民衆から親しまれた。なお、この時期、行商のかたわら、平行して3つの社会教育的活動を展開しているので、以下に紹介したい。

##### A 信濃教育会附属図書館の創設

長野県の図書館は、明治20年代に5館、30年代に61館が設けられたが、5～6千冊台の2、3の館を除いては、蔵書数が少ない館ばかりだった<sup>39)</sup>。信濃教育会には20年代から図書館設立計画があったが、実現に至らず、36年2月の定例評議員会で再び設立の件が協議され、9月には設立趣意書が発表されて準備が重ねられたが、日露戦争のために頓挫した。この36年秋、他の会員と共に熱心だった保科は、その後も総集会のある度に図書館の必要を“絶叫”し、教育会幹部もその熱誠に動かされて39年

に開設を決し、40年3月には開始委員を囑託して陣容を整えた<sup>40)</sup>。

しかし設立費予算はわずかに300円で、書籍どころか書棚や机を購入するにも不足だとして、委員一同辞任を図るが、それを慰留したのが保科だった。彼は、自己の所有する書籍全部を図書館のために寄附し、それを“お囷となし”て県下の学者・教育家・政治家・法律家等から書籍の寄附をあおぐ方策を着想し、3月下旬、開始委員長・市長・市参事会員・教育会長に設立方法を具申してまわった。月末、評議員会から創立掛員に任命され、“金銭物件の寄附勧誘掛を無報酬無旅費にて拝命”したと称して、彼は8月上旬、「私見」を「長野新聞」に発表し、18日、郷里に帰って檀那寺の津金寺を訪れ、檀徒惣代会を開き仏書全部寄贈の件を相談したほか、1カ月以上の間、佐久・小県・更埴を巡った。

愛着深い地質学の英文原書を含む蔵書1700余冊(個人寄贈中最多)を手離した彼の奔走によって、信濃教育会附属図書館は1万7千余冊の蔵書数を誇る県内最大の図書館として、40年6月15日に開館式をむかえた。5～6百円で3～4万円クラスの“三府を除いては無論一等図書館”がわずか2カ月で出来たことは、日頃誇大を好む彼をすら“今回に限り自分乍ら一驚を喫したり”との心境にさせた。この年の2月、子爵渡辺国武(1846—1919、諏訪出身、第1・2次伊藤内閣蔵相、38年逓信大臣、伊藤を援けて政友会を組織するが、戦後財政整理に関し首相と意見が合わず辞職)を東京麻布に訪ねた彼は、“信濃図書館”の額面揮毫を願って持ち帰り、閲覧室に掲げた<sup>41)</sup>。

その後も、彼は県予算増額や隣接地への公園造成と美観形成、書籍寄贈の財産家への要望などの意見広告を発表し、同館の整備充実に関心を砕き続けた。(昭和4年、守屋喜七らの運動により県立に移管され、“長野図書館”と改称され、今日に至る)

##### B 衆議院議員選挙への出馬

彼は、40年9月と41年5月の2回、衆議院議員選挙(前者は補欠選挙)に立候補した。両回とも、新聞への意見広告を除いては選挙運動をせず、得票数は22票と23票にすぎなかった。もとより、当選を期待しての行動ではなく、彼には代議士への侮蔑はあっても尊敬はなかった。出馬に駆ったのは政界腐敗への義憤であり、“天竺浪人”を名のる彼は、投票をめぐる贈収賄、政治家の金権体質、代議士の無主義無節操や無能を実名入りで批判し皮肉った。さらに、“腐敗せる選挙界を攪乱し、廓清せんがため”に、直接間接に徳望を確認しえた県内15名の

人物を列挙短評し、理想的な候補者として県民に推薦した<sup>42)</sup>。

保科の立候補は、有権者が与えられた選挙権を濫用することなく、人格識見ともに秀れた人物を選び、健全な立憲政治を培養する旨を県民に訴える政治教育的動機に導かれていた。

### C 「信濃公論」の発刊

「武石学校新聞」を発行(29年)し、30年代半にも信濃毎日新聞社に毎日のように訪れ、主筆・山路愛山の論説をからかい半分に思い切った批評をするなど、新聞に関心を寄せていた彼は、41年11月、牛山清一郎(元牧師・信毎記者)と共に週刊新聞「信濃公論」を創刊し、みずから社長兼小使と称した。彼らの意図は当初から社会教育にあり、“不偏不党権勢に阿諛せず富貴に淫せずユスリもせず脅迫もせず独立独歩”を方針とし、公平無私に“他新聞の書き能はざることを無遠慮に且痛快に論議する”<sup>43)</sup> ことにあった。同紙は、県下時事問題をはじめ、文学・教育・宗教・科学に関する記事のほか、保科のモラリスト風のエッセーや旅行記・日誌(記)を掲載した(43年12月まで刊行)。

## VI 奇行の人

以上により、彼が多才かつユニークで、体力強大、実行力絶倫の人物であることは理解されようが、庶民に愛され、昭和に入ってもその名が“益々噴々として人口に膾炙せら”れたゆえんは、これらの業績と共に、否、それ以上に彼の奇行にあったといつて過言でない。

### A 「奇人百種」第一等当選

キリスト教の影響から、20代前半には禁酒家で、真摯な印象を与える青年だった保科は、30歳頃から相当なドラッカーに変身し、赤毛布をコートがわりに被って公衆の面前に出て憚らず、学校の裏の掘で真裸になって笹で泥鰌や小魚を捕えるなど、校長先生にはあるまじき野人ぶりを発揮するようになった。

満10年の教職期間中、大豆島での被差別部落の児童の隔離策の否定と分校廃止=本校への統合の強行など、保科は周囲と対立することが多かった。“五無齋対校長村長郡長郡視学知事学務課の衝突は長野県教育史の数頁をうむることならん”<sup>44)</sup> と豪語した彼は、34年3月の辞職に際しても、“夫ノ人ノ子ヲ賊ヒシコト 勘カラズ、衷心竊カニ安ンゼザルモノ有之候”と、真摯な自省や謙遜の流露とも解しえるアイロニカルな微言的文面の辞職届を

“学務課の役人共を見限りての離縁状”<sup>45)</sup> として知事に提出した。激怒する県学務課官僚との間に立って狼狽する郡長と郡視学の懇請をうけて、彼は内容を“家事の都合”に改め、届も願に変更した上で依願免職の辞令を受けた<sup>46)</sup>が、1カ月後、初めの文面と同じ広告を「信濃毎日新聞」に発表した。

浪々の身となつての漫遊中も、山から降りて来ては信濃教育会総集會や同部会総集會に出席し、参会者が皆威儀を正して肅然としているなか、<sup>はつひ</sup>法服姿や古洋服に脚絆ばき姿で現われ、県視学や師範学校長を揶揄した。また演説申込みが受理されないと、それを不服として昼休みに突如登壇して演説し、満場の拍手を浴びた<sup>47)</sup>。日本アルプス跋涉中、偶然会った県会議員に職業を問われた彼は“俺か。俺は地球をぶっ欠いて商にする職人だ”<sup>48)</sup> と答えている。このように、彼は行政権力との対決を辞さず一代の反抗児となったが、その“陰には、自己の誠実なる姿を自ら正視するに忍びない血みどろの内心争闘のあった事を看過す訳には行かぬ”<sup>49)</sup> と、友人は同情を寄せる。

35年頃、諏訪郡瀬沢で草鞋が破れたので購おうとした際、一厘不足だったため値引きを掛け合うが、店の老媪に拒絶されて詠んだ狂歌“おあしなし 草鞋なしには 歩けなし おまけなしとは おなさけもなし”から、以前、蜻洲(居士)としていた号を“五無齋”に改めた。これは、林子平の“六無齋”、独身を示す“ご無妻”、信州方言で不潔を意味する“ゴムサイ”へと多義的に連想が働くように意図された号でもある。異様な風体で出歩くことの多かった彼に、35年、山路愛山の紹介で初めて出会った牛山は、“百舌の鳥巢の如く乱れた長髪、天狗鼻下のチビ鬚、大きな口の黄色く黒い歯に底光りのする眼”<sup>50)</sup> と、彼の風貌を形容している。

保科塾の気風は豪快だった。寒中、部屋の障子は破れ放題で雪が舞込むなか、毛布を被って机にむかう塾生を前にして、彼は肌脱ぎで近古史談や十八史略を講じ、火の気のない教室で生徒が少しでも寒いそぶりを示すと大喝を喰わせた。酒を絶やさぬため顔の赫い彼の吐く息は臭かったが、一度び壇上に立って論語の講義をするときは、“理路井然、熱を以て終始された”という。第一期生の一人は、塾の教育方針を、少々の寒さや空腹を斥け上司の圧迫に辟易せぬ進取敢為の気象を養成する“意気の教育”だったと回顧している<sup>51)</sup>。

無雑作に漬大根を丸かじりする酒々落々の風貌を有し、細節に拘泥せぬ彼の定めた塾規則には滑稽なものが多い。月謝は“五銭以上随意なりと雖ども成可く多きをよしとす、ときに花娘など最も妙なり”図書借覧料は“金〇厘

以上壹万円以下を納付すべし。但し物品代納の場合ニハ正宗の大瓶など尤も然るべき事（玉の井、花娘等にも苦しからず）とされ、貸出の正規手続きのほか“但しツンドク カリトク 棚ヘアゲトク 箱ヘイレトクの場合ハ此限にあらざ”と補足を加えた。「参観人名簿」中の“参観人ハ殊更ニ礼服を着用するニ及ばず”“参観人ハ教室内に於て放言高談喫煙飲酒等勝手たるべき事”“参観人ハ随時飛入授業を為すことを得”の心得各条<sup>52)</sup>には、活きた人間教育の場を創造しようとする熱気が充溢している。各界人士の集まり談論風発する保科塾は、さながら“梁山伯”の観を呈した。

「読売新聞」は、こうした彼の奇行ぶりの一端を、「奇人百種」の最終回（38. 5. 23）に掲載された第一等入選作品「保科五無齋」によって世に紹介した<sup>53)</sup>。同紙は37年11月29日の第1面に社告を掲げ、維新以来の奇人の奇行録を募集し、応募作のなかから百点を選んで、翌年元日から連載し始めていたものである。賞金10円を獲得した作者・一瀉千里は、保科の綽名“逆一先生”が師範学校卒業時の席次（末席）に由来すること、教育会に臨席して演説を申込むが、演題が「糞の成分を論ず」「教育会長の無能を歎ず」といった種類のため、幹事から排斥され、他人の演説にドラ声をあげて妨害を試みることを、巡回して来る郡視学の宿に押しかけ、鹿爪らしい頰鬚を引きつかみ、四隣へ轟く大音声で遊廓へ行くことを迫り、視学も外聞を憚るとの頰の痛さにやむをえず伴をしたといったエピソードを初め、鉱物採集の業績、私塾開設とそこでの200余名の子弟の薫陶につき、短く叙述している。

この作品により、彼の名は全国に知られたが、その奇行は以上に留まらなかった。

## B 風 狂

名声の揚がる彼の人気は高く、39年5月、野沢婦人会の招聘に応じた講演の後などは、“仰山ほど長髪を垂れ紺の折色の綿服に角帯、黒の木綿羽織に九曜星の大紋染出したるを着し、白の太き紐を結びなした風采”の人物が五無齋との噂が伝わると、村民が“蟻の如く彼の周囲に群集して盛に献酬を行った”<sup>54)</sup>。この直後、彼は入信した東郷平八郎海軍大將ら3名の凱旋将軍の歓迎会に、主催者から一度出席を謝絶されながらも十数回の交渉の末に演説をしない条件で入場を許可され、席上、演説拒止の任に当り左右に控える警部長と市長をわずかの隙に振り切って立ち上がり、大声一番、短歌三首を朗詠してロシア敗北と三閣下万才をうたい、満場の喝采を浴びた。東郷は彼の容貌を寛政三奇人の一人・高山彦九郎に比した。

40年、“小車を引張りつゝ一々書籍を貰ひ歩く事は他

の御方には余り馬鹿々々しくて出来ぬ事に御座候。五無齋は筆墨行商の序を以て致す事なれば如何に見苦しき事にも可致候”<sup>55)</sup>と宣言し、“名家に就いて寄贈を強請して、掠奪にも等しい書巻蒐集の勝手の振舞を演じ”<sup>56)</sup>て信濃図書館の創立を導いた保科は、その後、母校卒業式や来長する名士歓迎会に、招かれもせずに押しかけては演説を試み、その内容を「公論」に発表した。

例年、師範学校卒業証書授与式に同窓会総代を務めた先輩湯本政治の懇請をうけて、36年3月、総代として招かれた保科は、席上“只今校長は地方に於て卒業生の赴任を待つこと恰も大早の雲霓を望むが如しと云はれたが諸君斯る言を信じて己惚れてはならぬ、師範卒業生の如きは今日既に<sup>そうしめう</sup>策鱒である。諸君此の策鱒と云う語を忘るゝ勿れ。聊か以て祝辞となす”と寸鉄人を刺す言を後輩に向かって放った。その後、真黒になった麦藁帽・破れた赤毛布と生莫座姿で同校生徒に講話することもあった彼は、42年春、再び母校卒業式に新聞記者の身分で現われ、“誰に頼まれたるには非れども一場の宣戦演説”を試み、“只今知事の訓辞は音吐朗々たるのみにて普通一遍のものなれば、更に一顧の価値あることなし”と言い放って知事や学務課の支持する師範3校案を批判した<sup>57)</sup>。

41年、政友会総務松田正久の歓迎会席上、泥酔の余、松田の前に坐って政友会の悪口を言って去らなかつた保科は、翌42年6月、産業視察に来県した内相平田東助の歓迎会に出席を求めるが、前歴を知る主催者に断られる。当日も再三、入場を断られた保科は、玄関先に机を出して「平田内務大臣遙拜所」と大書掲出し、旅館の料理部から酒と料理を取り寄せて飲み、大気焰をあげた。陳情予定の意見書は「公論」に掲載され、平田に送付された<sup>58)</sup>。さらに43年8月、日本女子大学の基金募集を兼ねた北越地方講演行脚の最後に長野市を訪れた成瀬仁蔵・渋沢栄一らの歓迎会に出席した保科は、能力特性上から女子に高等教育は不必要かつ有害であること、良妻賢母主義と高尚深遠なる学術研究の場たる大学の理念とは相一致しないことを縷説した後、同大学では真に大学程度の教育を施しているのか、“女子大学なる名称は、徒らに虚名誉心高き女子を吸収して教育を以て一種の営業と為すもの”ではないのかと疑問を発し、寄附金募集についても“殊に男爵が亜米利加人カーネギーを引いての御演説難有過ぎて涙が溢れるゝ程なり。最早土百姓共が汗水たらして溜めたる端金や、木の葉商人が一二銭を儲けたる臍線に御用は無からん。日本のカーネギーとも称すべき渋沢森村両翁にあらば百万二百万の金は直ちに弁ずることならん”と揶揄する一方で、市が解決を要するのに放置している事業（善光寺仁王門焼失問題や盲啞学校、

養育院等)を挙げて財政窮迫を暗示した。“日頃の疑問に対し成瀬学長の明答あらば幸更に甚し”との希望に対する応答はなく、一行は募集の意を告げえずに長野市を去った<sup>59)</sup>。

保科は虚偽矯飾を極端に嫌い、聞きたくない人間にも不快な真実を語り、その舌鋒は痛烈だった。権勢を顧みず、自己の意志に反するものは公私と場所を問わず遠慮会釈なく攻撃弁駁したため、官権の忌諱に触れ、一部の人々からは蛇蝎視され、厄介者呼ばりされたが、県教育界の重鎮・渡辺敏に“以て一なかるべからず、以て二あるべからず”と評され、教師間にも人気が高かった。41年5月に開催された信濃連合教育会では、会場にいる商人が五無齋と聞き知ると、初め白眼一瞥を与えるのみだった新潟県人さえも、彼の声咳に接しようと筆墨を買い、揮毫を請う者が陸続とし、さらに一席の講演を乞うて信州側幹部に交渉してきたほどだった<sup>60)</sup>。保科は懲瀆されて登壇し、千曲川治水問題を長時間講じて傾聴せしめた。傍若無人の言動をなして県学務課ときびしく反目しながらも、彼が一世を風靡する活躍を信州教育界でなしたしたのは、その意気軒昂と実力もあることながら、高逸で型破りな生きざまや奇才と先見の明を愛した信州の教師の支援があったからである。この点、信濃教育会は懐が深かった。

保科は茶人であり、楼の広間に糸心蠟燭百丁を点して宴を開いたこともある風流人で、42年11月28日には鉱物標本展覧会を信濃教育会事務所に開催すると同時に、賞盃百個を披露する「百盃会」なる園遊会を同所庭前と隣接する犀北館の庭園に催し、大山知事以下数百名を招待した。2つの庭には4斗樽の鏡が打ち抜かれ、高く置かれた樽からは竹を割った桶へ酒が流れ、入場者は庭一杯に散在して酒を汲める趣向を凝らし、蝨田作・数の子・蜜柑等の肴や薩摩汁が振舞われた。さらに犀北館主人の好意により、同館の美形数名が園遊会場を幹旋して殺風景を調和し、使用人夫までも高声戯歌を歌い出するなど、嬉々たる雰囲気呈するなか、集った議員・医師・弁護士・記者・実業家等の人士は五無齋の事業の前途を祝し合った<sup>61)</sup>。

44年元旦の長野市主催新年名刺交換会には騎兵の軍服(胸に黄色い肋骨形の飾りのある黒い上着・外側に青線の通った真赤なズボン)を着て、腰に懐中時計がわりの目覚時計をさげて出席し、名士300余名の参集するなか、自ら先んじて最上席につき、最後の一人になるまで飲みあげて傲然と引き上げた。彼は斗酒尚お辞せざる酒豪だった。

なお、39年11月、彼は自分の姓名を含ませた悪戯のよ

うな書名の狂歌集「よいかゝをほしな百首ケ」を出版した。同書は、経歴を戯画的に叙述した部分と「妻君の品定め」なるコミカルな短文の後、“年取って 見れば無暗に 思ふかな 此世でどうか かゝをほしなと”“垢じみた 着物きるたび おもふかな おはり上手な かゝをほしなと”といった狂歌百首を狂画と共に収めたものである。駄句も多い、これら百首は、“初老の声を聞くこと近く一兩月の間のみ。命旦月に逼”った彼の痛切な求妻の真情を発露したものとも、現実の女性への嫌悪と諦念を滑稽に表現したものとも解しうる。塾経営破綻後、自著刊行により利益を挙げようと金策の末の出版だったが、結果は意外の損失となり、つづいて刊行予定の3著作は未刊に終わった。

## VI おわりに——五無齋禅と教育宗総本山——

“山賊式面想と佐久的粗暴の言語”を自認した保科について、友人たちは天衣無縫・磊落敢為・豪放不羈と評するが、同時に細事に行渡る常識人であり、紳士であったことを証言している。丸山は“細心で、几帳面で、義理堅くて、人間味人情味が豊かで、常識のよく発達した、心事高潔な人物であり乍ら、日常の行為に現はれる所は放膽でやりっ放しで、不義理・非人情・無作法、奇言、奇行、罵倒、皮肉、以て足れりとした如くであるが、それは餘りにも自己の真面目さに堪えられなくて、強ひてそれを抑へつけて居たものである”<sup>62)</sup>と同情を寄せる。倫理的潔癖さは自己呵責となると共に、世の不正や偽瞞との非妥協的な闘いを強いる叛骨となったが、他方で常に厭世を孕ませた。“いやだいやだいやだ いやだというのもいやだやだ”<sup>63)</sup>人類という動物は“人の美を為すの性質に乏し”く、“汚穢醜悪言語同断なり”“ゆっくりと娑婆に暮して さておいで わしはト足一寸お先へ”(38年作辞世句)等、世俗からの出離の念は強かった。

しかし、隠遁趣味はなく、通俗滑稽の精神にたゆたうことで灼熱する魂を和らげ、かつ韜晦した彼は、常に現実の具体的改善改良に心を砕く経世家であった。彼は“浮世の名聞利益を捨て、俗事の為めに精神を錯乱せられざる”方途を禅に見出したが、坐禅は非生産的であるとして斥け、生産的活動に禅を求めた。そして、世界三大宗教の開祖が人跡未稀なる所に至り沈思黙考したことにみずから比した鉱物採集を、その無我無心の体験から五無齋禅と号づけた<sup>64)</sup>。この専心集中は、寄贈凶書を漁り歩いた際の“熱に浮かされたやうな姿”にも現われたが、そうした捨て身の活動の背後に存し、ないしはその延長上に収斂するのが“どうしても 無いと言ふなら



思ふかな 森羅萬象 かゝにほしなど<sup>66)</sup>にみる、全身を大自然に投入し融合帰一せんとする自裁にも近い ecstatic な希求である。19歳で失った慈母への思慕にも通ずるこの感覚にこそ、家庭的温愛に恵まれなかった彼の恐ろしいまでの奮闘的気質の秘密がある。26年、勝海舟に短歌を送って知遇を得、無辺依禪・渡辺国武とも肝胆相照らしたように、禅道に凝っている政治家に、彼は親近感を抱いていた。

伴侶を得られず“日本一の窮民で 三つ兼ねたれ 鯨と孤と獨”の寂しさから“濁酒でも飲み脳充血か心臓魔痺でも誘発せしめんと思ふなり”と、自暴自棄が胸中巣喰っていた彼は、日頃の自殺行為にも等しい大酒がたたり、44年5月25日、脳動脈栓塞に倒れ、本懐をとげるが、見舞人は“大山知事を始め頗る多く問尋の書状又山をな”した。6月8日の葬儀(前日死去)には、土地の遠近を問わず諸方から知友が馳せ集まり、長野市内居住者には生前彼が冷罵を浴びせた人の顔までみえた。市内寛慶寺の極めて簡素な式場で行われた葬儀は、高位高官富家の壮麗な葬列にもみられない“心からの手向を仕様とする、同情と哀愁とに満たされた……深い精神の籠った”ものだった。“無位無冠無職無妻貧乏極まる五無齋の死に面して、茲処にも深い人生の謎を解き得たかの感慨に打たれたことを、今に忘れない<sup>67)</sup>”と守屋は述懐する。保科は鋭敏な倫理感と共に、爛漫たる天真と無邪気さを兼ね具えた人物で、“真情陶すべき稚気を帯び、心行くまゝに己を忘れる様なるはしい点<sup>68)</sup>”があり、その人情美から、一度彼と接した者は“自然に愛着して其記憶を離るゝこと<sup>69)</sup>”がなかった。

師範教育が確立整備され、教育プロフェッションの法制化が進み、小学校教員出身者が重要ポストに就いて<sup>70)</sup>官僚支配も緩和された反面、明治40年代に入ると、教師の人間のスケールは逆に萎縮していったきらいがある。守屋は、教職に従事した40年間で“明治三十年代程、教育界が張り切って積極進取の意気に燃え真に愉快を感じた事はなかった”と、燦然と光彩を放った時期たるを証言している<sup>71)</sup>が、これと符節を合わせるように、保科は43年に、県教育界が10年前と比較して“高義清節の皆無なると意気地の甚だしく消沈した”ことに歯搔きを訴え、“閑雲野鶴を伴とする世捨てられ人が時世遅れの白髪頭が古今独歩誰も指をさゝぬ程斯界に權威を持つのだと洵にあはれむ次第成ずや 圭角消磨円転滑脱は小才子処世の要訣かは知られども 東西南北至る処に圭角の白兵戦を繰り返して鍛冶幾百回玉成されて始めて所謂裸百貫大男児の価値あるを知らずや 起て眠れる信山教育家!”と叱咤した<sup>72)</sup>。40年代の信州教育界における志士の気概

の衰退は、陳腐な道学者的風潮への墮落として彼を苛立たせた。41年12月の「公論」は、近年の師範卒業生に“碌な奴が無い”と、師範無用論を載せている。こうした状況に対して、彼は42年2月以降、「公論」紙上に“教育宗総本山管長”なる誇大称号を呼号し、総本山辞令及び訓令を宣告し始め、学務課官僚・視学・校長の不徳醜聞や無能を暴露する大胆率直な人物評を掲載し、県教育界の人事行政に容喙することで、教育の発展と權威確立を図ろうとした。

自身を弘法大師と並び称した讃岐出身の教育学者・谷本富や、宿帳に“文部大臣”と署名して物議を醸した信州諏訪の教師・伊藤長七<sup>73)</sup>(保科と親交有り)にあい通ずる大言壮語癖をもつ保科は、筆墨行商の荷車に“保科五無齋時々出張”と大書した幟を押し立て、その左端に“我国で 名物男見立つれば 保科五無齋 伊藤博文”と書きつけ、また“我国で 二人男を見立つれば 保科五無齋 佐久間象山”と詠んで誇負に酔った。そんな彼を「読売新聞」は、人物月旦のなかで、“一種の教育狂”“信州に於ける教育勃興期の際に輩出せしめたる時代的産物”“清狂”と紹介した<sup>74)</sup>。

“故業忘し難しの原理”から、保科はその生涯を、神聖と信じた教育に関する事業に捧げたが、既述の活動のほか、小学校から大学までの授業料全廃、教科書学用品の公費支弁、小学校一学級生徒数の縮減、修身科廃止、県立大学・博物館の設立を主張した。

師道においては“旧幕時代の師匠様気質を固く取って動か”ず、教育勅語奉読時には、日頃の異様な風体をよそに正装した保科は、郷土の末裔たるプライドもあってか、文明開花期の教師にみられた地域社会の先覚者・指導者の気風を受けつぎ、漢学の素養に裏打ちされた経世済民の気概をもつ壮士肌の教育家であり、明治啓蒙期の鬼子であった。近代化と体制の秩序化は、徐々に英雄豪傑が活躍しうる現実的社会環境を喪失せしめたが、彼の風狂は、そのこととも無縁でなかったと思われる。

信濃教育会による「五無齋保科百助碑」(渡辺国武筆、明治45年、長野市加茂神社)と郷土有志の手になる「五無齋保科百助君碑」(渡辺敏筆、大正2年、立科町津金寺)は、状況に飼い馴らされぬ野性的知性のあり方を教えたこの教育者の功労を今に伝えている。<sup>75)</sup>(女神湖畔の立科町歴史民俗資料館に五無齋資料室がある：夏季開館)

“飲むからに どぶの中へも飛びこめば むべ水酉を酒といふらん”

(指導教官 寺崎昌男教授)

## 〈注〉

- 1) 唐澤富太郎『教師の歴史』創文社, 1955, p. 66.
- 2) 石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社, 1958.
- 3) 陣内靖彦「明治後期における師範教育の制度化と師範学校入学生の特質」石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教員社会史研究』垂紀書房, 1981.
- 4) 寺崎昌男「明治後期の教員社会と教師論」同上書所収, p. 176.
- 5) 石戸谷前掲書 p. 309 など.
- 6) 長野県教育史刊行会『長野県教育史』別巻(調査統計)昭和56年, p. 764, 表64.
- 7) 長野県佐久郡教育科学研究会『長野県教育のあゆみ』労働旬報社, 1975, p. 41.
- 8) 守屋喜七「感謝の一念」『信濃教育』第549号, 昭和7年7月, 『守屋喜七文集』昭和26年に所収, p. 24.
- 9) 守屋喜七「五無齋保科君」『信濃教育』第507号〈保科五無齋記念号〉昭和4年1月(以下, 〈記念号〉と略称)所収, p. 121.
- 10) 中沢照琳「保科五無齋とは如何なる人か」同上書所収.
- 11) 拙稿「保科百助——風狂と教育——(研究ノート)」『研究室紀要』第11号, 東京大学教育学部教育史教育哲学研究室1985年6月.
- 12) 脇水壽山「故保科百助君の靈に問う」〈記念号〉p. 39.
- 13) 八木貞助「保科百助君の功績」同上書, p. 53.
- 14), 15) 保科百助「通俗滑稽信州地質学の話」『信濃毎日新聞』明治36.1.9~4.16, 佐久教育会『五無齋保科百助全集』, 昭和39年(以下『全集』と略)所収, p. 11, 6.
- 16) 大沢茂樹「先生の片影」〈記念号〉所収.
- 17), 18) 保科前掲論稿, p. 7.
- 19) 「野帳」第3冊, 佐久教育会『五無齋保科百助評伝』, 昭和44年(以下『評伝』と略)p. 101 補足の言は, 父の遺言に背いて百助の財産を分与しなかった長兄への皮肉とされる.
- 20) 保科百助『よいかゝをほしな百首け』, 明治39年, 信青年社, 緒言, p. 4.
- 21) 明治維新以前, 山に登る行為は一部名山を描く風流人の登山か, 信仰に基づくもの, または生活の資を得るためのものであったが, 近代化とともに, 軍事測量学術調査レジャー・スポーツ等の目的のために登山がなされるようになった。ウェストンの日本アルプス紹介等の日本近代登山史上の展示資料は, 大町山岳博物館(長野県大町市神楽町)を參觀されたい.
- 22), 23) 『信濃博物学会雑誌』第1号, 明治35年8月15日, p. 50.
- 24) 14) に同じ.
- 25), 26) 『信濃博物学会雑誌』第4号, 明治36年4月25日, p. 45, 第6号, 同年7月15日, p. 37.
- 27) 『信濃教育会雑誌』第201号, 明治36.6.25.
- 28) 中村新太郎「五無齋氏と地方地学」〈記念号〉所収.
- 29) 和田八重造「保科百助君」同上.
- 30) 保科『新案教授法』明治43.1.29, 『全集』所収. pp. 98-99.
- 31) 『長野県教育史』第2巻, p. 428.
- 32) 同誌, 明治36.10.9, 『評伝』所収, p. 259.
- 33) 滝沢鼎吉「五無齋先生の思い出」〈記念号〉所収.
- 34) 浅井 冽「保科百助君」〈記念号〉所収.
- 35) 丸山弁三郎「保科百助氏」同上.
- 36) 出浦四郎「保科塾の前後」同上.
- 37) 9) に同じ.
- 38) 三村邦雄「保科先生筆墨行商中の一齣」〈記念号〉所収.
- 39) 31) pp. 777-785.
- 40) 『信濃教育会雑誌』第248号, 明治40.5.25, 信濃図書館録事, p. 1.
- 41) 以上は, 保科「信濃教育会附属図書館創立趣意私見」『長野新聞』明治40.4.6~4.10, 『全集』pp. 282-285, 同「信濃図書館談」『信濃毎日新聞』40.6.17, 『評伝』所収, 土屋良遵「五無齋に関する二三の事」〈記念号〉所収, 等に依る.
- 42) 「立候補広告」『信濃毎日新聞』41.5.6, 『評伝』pp. 314-5.
- 43) 「信濃公論」第34号, 42.6.23, 『評伝』pp. 314-5.
- 44) 保科「教育宗総本山辞令」『公論』第15号, 明42.2.10, 『全集』p. 308.
- 45) 同上.
- 46) 同上.
- 47) 土屋彌太郎「思ひ出すまゝ」〈記念号〉.
- 48) 16) に同じ.
- 49) 徳永晁岷「五無齋の片鱗」〈記念号〉.
- 50) 牛山雪鞋「保科五無齋と僕」同上.
- 51) 以上は 33), 34), 36) に依る.
- 52) 「図書貸付帳」(37.1), 「參觀人名簿」(37.6) 『評伝』所収, pp. 260-264.
- 53) 従来, 調査もれにより『全集』年表等で, 40年のこととされたが, 誤りである.
- 54) 森 繁吉「保科五無齋君を偲ぶ」〈記念号〉.
- 55) 保科「私見」前掲.
- 56) 窪田茂喜「県営図書館と五無齋先生」〈記念号〉.
- 57) 「師範学校卒業式」『公論』第23号, 明42.4.7, 『全集』pp. 312-314.
- 58) 「乍恐以書面御願申一札之事」『公論』第36号, 42.7.7, 『全集』p. 322.
- 59) 「波沢勇爵一行歓迎会席上」同試第94~95号, 明43.8.20~9.15, 『評伝』『全集』所収. なお, 『日本女子大学校四十年史』(昭和17年)は, 当時を「女子教育最寒の時代」とし, 一行は各地で反動的空気を強く感じさせられたと書いている. pp. 160-163.
- 60) 54) に同じ.
- 61) 「地学標本展覧会」『公論』42号, 『評伝』p. 71.
- 62) 荒木茂平『人間保科五無齋』保科百助後援会, 昭和31年, p. 33.
- 63) 35) に同じ.
- 64) 明治30年作の狂歌『評伝』p. 512.
- 65) 14) に同じ.
- 66) 『よいかゝをほしな百首け』第百首.
- 67), 68) 9) に同じ.
- 69) 佐藤寅太郎〈記念号〉「巻頭之辞」.
- 70) 36年, 渡辺敏が信濃教育会副会長に, 43年佐藤寅太郎が県視学, 翌年教育会副会長に選出された.
- 71) 守屋喜七「信州教育に関する一端」昭和12年『文集』p. 24.
- 72) 「時事短評」『公論』第76~95号, 『全集』pp. 254-5.
- 73) 信濃教育会『教育功労者列伝』昭和10年 p. 155
- 74) 黒頭巾横山健堂「旧藩と新人物」(99) 明治43.7.23. 『評伝』pp. 354-5.
- 75) 藤森栄一は, 信州教育界が支那事変後, 軍部の圧力に抗し切れずに崩壊していったのは, 保科の抵抗の精神を育てられなかったため, と指摘している。「信州の教師像」『信濃毎日新聞』昭和45.6.2. また, 『信州教育の基標』(学生社: 昭和48年)では, 信州の卓越した理科教育家・三沢勝衛への保科の実学精神の影響に触れている.